

令和元年6月11日現在

機関番号：34314

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16621

研究課題名(和文) 中世浄土教における新出写本の文献学的研究

研究課題名(英文) Philological Study of Newly Discovered Manuscript in the Japan Middle Ages

研究代表者

南 宏信 (Minami, Hironobu)

佛教大学・仏教学部・講師

研究者番号：80517003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：近世初期に固定化する浄土教典籍の変遷過程を中世の新出写本に依拠しつつ実証的に解明することを目的とし調査・研究をおこなった。具体的には浄土教典籍である良忠(1199-1287)の『往生要集鈔』、『浄土宗要肝心集』、聖岡(1341-1420)の『決疑鈔直牒』の最古級写本および新出本の調査の機会に恵まれた。当該諸写本を中心に考察を加え、典籍の原初形態を解明する遡及的研究を実施し、かつ近世初期における浄土宗の問題意識を可視的にできるように諸本を比較した。その成果として口頭発表・論文執筆・翻刻作業など、研究成果の公開に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の研究史の展開の中で新たな問題となった、あるいは見過ごされてきた課題を遂行することで、中世浄土教典籍にとどまることなく、近世初期の出版文化や宗派との問題意識を俯瞰する、複数の学問領域にまたがる波及効果の一助となる事を期待する。

その成果を社会・国民に発信する方法としては、「Read & Researchmap」(<http://researchmap.jp/>)等のインターネットサイトで論文を積極的に公開していく。また文献研究において不可欠な基礎資料を翻刻し、提示・公開することで研究環境の整備を図る。

研究成果の概要(英文)：I carried out a survey and research that aimed to empirically elucidate the transformation process of Pure Land canonical texts, which would become fixed at the beginning of the early modern period, while relying on newly discovered manuscripts from the middle ages. I had the opportunity to survey some of the oldest manuscripts, as well as newly found manuscripts, of the Pure Land canonical texts Ojoyoshusho and Jodoshu yokanjinshu, both by Ryochu, as well as Ketsugisho jikitetsu, which is by Shogei. In addition to an analysis centered on these manuscripts, I also carried out retrospective research to make clear the original forms of these canonical texts, as well as compared these texts as to make visible the concerns of the Pure Land sect at the beginning of the early modern period. I worked to share the fruits of my research through oral presentations, writing articles, and text reprint-related work.

研究分野：人文学

キーワード：法然 良忠 聖岡 『往生要集鈔』 『往生要集義記』 『浄土宗要肝心集』 『決疑鈔直牒』 『選撰集』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年の仏教学におけるデジタル画像、電子テキストの公開は、インターネット上で目覚ましい速度で展開し (IDP、高麗大蔵經研究所、日本古写經 DB、SAT、CBETA、浄土宗全書検索システム、『浄土教典籍目録』等) 我々は日々その恩恵を受けている。

しかし問題もまた内在する。例えば、『浄土宗全書』(全 20 巻、以下『浄全』) の殆どは近世の版本を底本としており、後人の増広・編集が加えられた文献までも無批判に掲載している。つまり中世の人物・歴史を研究する際、依拠すべき古写本があるにもかかわらず、改編された近世の版本を無批判に根本資料にすることが往々にして確認できる。まさに目的と方法論が齟齬をきたしている未発達の研究状況といえる。

(2) 我々は過去そのものと直結してはならず、連綿と受け継がれながら変容してきた思想の延長線上に立っている。よって中世から近世にわたる浄土宗の問題意識を実証的に解明することは、看過すべきでない重要な課題であると捉える。

近世の版本には後人による改竄問題がしばしば指摘されているが、それがこの時期に成立した浄土宗僧侶の養成・学問所である十八檀林や、同時に華開いた出版文化の影響であることを意識した研究は十分でない。

2. 研究の目的

(1) 近世初期に固定化する浄土教典籍の変遷過程を、中世の新出写本に依拠しつつ実証的に解明することである。

従来の研究は『浄全』等の活字本に依拠してきたが、これらの大半は近世の版本を底本とする。近世の版本には後人による改竄問題がしばしば指摘されているが、それを意識した研究は十分でない。そこで新出の中世写本と近世版本とを峻別し、一方では典籍の原初形態を解明する遡及的研究(基底)を実施し、かつ両書の比較を通じて他方では近世初期における浄土宗の問題意識(展開)を可視的にする。それにより従来の研究における目的と方法の齟齬を是正し、その典籍の改竄を「近世初期浄土宗の問題意識の表出」として積極的に位置付け直すことを目指す。

3. 研究の方法

(1) 本研究で扱う文献は『往生要集鈔』(『同義記』、以下『鈔』『義記』)、『浄土宗要集』、『決疑鈔直牒』(以下『直牒』)である。これらはすべて改編を経て近世初期に現在の内容に至ったことを実証している。そこで明確にすべきは、中世の古写本と近世の版本との内容を峻別し提示することである。まずは典籍の原初形態を解明する手立てとして(1)未調査である所蔵機関を書誌学的に調査し、伝本の整理・流伝を考察する。(2)公開のテキストデータベースを活用することで、近世版本の翻刻作業の軽減を図りつつ、古写本と版本との相違を踏まえつつの翻刻を遂行する。ここまでの作業で「近世初期浄土宗の問題意識」をアプローチする地盤を整える。(3)古写本と近世の版本との比較が可能となり、その改編箇所を確定することができ、(4)この比較研究によって、近世初期版本に潜む問題意識を解明していく。

(2) また典籍の原初形態を解明する遡及的研究(基底)の一環として法然(1133-1212)の選択本念仏思想の主要概念である「八種選択義」の成立過程を研究する。その理由は、この「八種選択義」は法然『往生要集』諸釈書で示される「六義」を淵源とし、次第に昇華させていくことで『選択本願念仏集』(以下『選択集』)で完成する。その成立過程の淵源に『往生要集』の影響が確認できるからである。また良忠(1199-1287)の『鈔』はこの『往生要集』諸釈書をほぼ引用しているが、『義記』へと増広・編集される際には『往生要集』諸釈書の引用形式を改編していることも指摘されている。よって「八種選択義」成立の解明が必要であると判断した。

4. 研究成果

(1) 身延文庫本蔵『決疑鈔糅議』断簡と『直牒』の諸本について。浄土宗第七祖聖岡(1342-1420)撰『直牒』全十巻の諸本、特に日蓮宗総本山身延山久遠寺身延文庫所蔵の第七巻(以下身延文庫本)を中心に考察した。『直牒』諸本は江戸時代初期の版本を数種確認しているが、身延文庫本はそれらを百年余り遡る奥書を持つ唯一の写本であり、また本文も一部異なる。

かつて身延文庫本を考察する前作業として、確認可能な『直牒』の諸版本を整理した(拙稿「聖岡撰『決疑鈔直牒』諸版の考察」、『印度学仏教学会』60(2)、2012年)。諸版本は寛永六年(1629)古活字版、寛永九年(1632)、慶安三年(1650)、慶安五年(1652)、明治一七年(1884)の五種を確認している。この中 〃は形式的には同様の版式であることから、刊記の差し替えや覆刻であろうと予想したが必ずしも刊記の年号通りに並ばない事情を確認した。

その後『直牒』諸本の実見調査を進める中で、寛永九年中野版の覆刻と思われる慶安三年版の跋文の問題注目し、諸本の黒口・文字を確認した。その結果、(慶安三年)は(寛永九年)の覆刻ではあるが、一部寛永九年の版木そのものも使用しているなど、複雑な開版状況を

見た（発表論文）。

『身延文庫典籍目録』下巻には「諸宗文・余宗」の項に「決疑鈔糅議卷第十一 一冊」（整理番号、二五・二 三）とある。「糅議」「卷第十一」とあるが、内容から『直牒』第七巻に該当する。奥書は「大永七年 丁亥 正月十日之夜半書」とある。大永七年（1527）は聖岡没後百七年にあたり、版本で最古の寛永六年版よりも百二年も遡る資料である。一冊のみながら、管見では最古にして唯一の写本となる。身延山がいつの時点で本書を蔵したのかは不明だが、当時浄土宗と談義を重ねていた日蓮宗総本山に本書が蔵されていることは興味深い。

部分的ではあるが版本系と身延文庫本の比較をするにあたり、共通箇所の記事、版本系のみにある文章、身延文庫本のみにある文章を考察する指針を示した。その結果、例えば『直牒』は多岐にわたる引用や諸師の説の典拠を明示しているが、身延文庫本では必ずしもそうではない事を確認している（雑誌論文）。今後は身延文庫本の翻刻を完成させるとともに版本系との比較を進展させ全体の構造を提示したい。

（2）東向観音寺蔵『浄土宗要集』巻第二

良忠には『浄土宗要肝心集』三巻と、それに増広を加えた『浄土宗要集』五巻が存する。前者の諸本には金沢文庫所蔵本（1287年書写）佛教大学蔵天性寺文庫本（1731年書写）佛教大学蔵松井達音寄贈本（江戸期書写）大正大学蔵本（1868年書写）がある。一方『浄土宗要集』には真福寺所蔵本（1376年書写）寛永十二年（1635）版本、慶安四年（1651）版本、文政二年（1819）版本が確認されている。そして東向観音寺本は『浄土宗要肝心集』から『浄土宗要集』への転換期の様相を伝える伝本として重要な位置を持つ（拙稿「東向観音寺蔵良忠撰『浄土宗要集』について」『仏教論叢』54、2010年、同「良忠撰『浄土宗要肝心集』上巻と『浄土宗要集』第二について」『佛教大学大学院研究紀要』38、2010年）。よってここに諸本との校異を付し、影印・翻刻を紹介した（雑誌論文）。

（3）良忠『鈔』『義記』の引用する一切経の系譜について

本研究の目的の一つ目は浄土宗第三祖良忠の著作、特に『鈔』（中世写本）を考察し良忠が引用する際に依拠した一切経を確定することで、日本中世浄土教における一切経の受容の様相を見るものである。

およそ良忠の著作は「報夢鈔五十余帖」と呼称され、膨大な数に上る引用典籍があり、その引用典籍を整理する研究は部分的に試みられている。これらの研究は基本的に『浄全』を使用しているが、石川琢道氏の研究によると『浄全』は主に江戸時代の版本を底本としており、それを遡ることが可能な中世写本と比較すると、増広・改編が確認できる事例がしばしばあるので、文献の扱いには注意が必要である。そこで二つ目の目的として、江戸時代の開版者らにおける良忠の著作群に対する引用経論の認識、校訂態度を明らかにすることを目指した。

比較・考察を踏まえて『義記』の凡例を確認するに、まず元治元年（1864）版が開版される以前に流布していたのは寛永十八年（1641）版『義記』であった。それから約二百年の間に先哲が所引経論を明版（嘉興蔵、正蔵部は1620年頃、続蔵部は1666年）と鐵眼道光（1630-82）が開版した黄檗版（1678年）とで校合して寛永十八年の誤り（と判断した箇所）を正し、欄外に記した。この「誤り」の原因を、誤写の可能性を含む唐・宋の古写本に依拠したからであろうと想定していることになる。明版（嘉興蔵）の覆刻である黄檗版の完成は一六七八年で、寛永十八年（1641）以後である。このような当時最新の大蔵経の出現が『義記』所引経論の校訂作業へと向かわせたのであろう。

本発表では全八巻中、僅か一巻の一部のみの考察ではあったが、その結果、良忠が『鈔』の引用で宋版を使用していたと言える用例は確認できなかった。また高麗版（『大正蔵』）と一致する用例を見たが、良忠が高麗版を見た可能性は低いと思われる。ここに日本古写経系統の可能性を予想するのであるが、写本の性格上誤写の可能性も垣間見えるので、現時点では一概に判じ難い。これらの原因として、『鈔』の孫引きの可能性も忘れてはならないだろう。

また江戸時代初期に『鈔』から『義記』に変わる際における出典考証の特徴、そしてそれが『浄全』に収録される際の特徴を見た。元治元年版『義記』の欄外註は『浄全』にそのまま踏襲されるが、その指示を本文に組み込んだ場合は削除されていた。また『浄全』の誤植かとおもわれる用例も見た。これらの一字一句の検討を踏まえると、前述の石川氏の指摘に加えて、『浄全』所収本は底本である元治元年を完全に再現したわけではないことを具体的に確認できた（雑誌論文）。

今後の課題として日本古写経との比較を進めるとともに、残り七巻を考察することで、用例を増やし、さらに『鈔』の引用経典の典拠を精査していく予定である。一連の研究は考察対象を『往生要集鈔』の他巻にも拡大し、考察を継続中である。

（4）『往生要集』と「八種選択義」の成立過程

選択我名の成立過程「八種選択義」とは、称名念仏が弥陀・釈迦・諸仏同心の「選択」であることを称揚するために『選択集』で「浄土三部経」を根拠として導出する概念である。その一つである「選択我名」は源信（942-1017）の『往生要集』大文第八念仏証拠門を淵源としていることを明らかにした。『往生要集』念仏証拠門において『般舟三昧経』三巻本の「念我」を引用し、それを受けて法然は『往生要集釈』等で「自説不自説義」を立てる。その後『逆修説

法』では、一卷本の「念我名」へと引用元を変更し「弥陀自言」を立て、さらに『選択集』において「選択我名」にまで昇華させる過程を見た。また法然が引用する「浄土三部経」は、ほぼすでに『往生要集』が引用していることを勘案して考察を加えた結果、八種中六種までが『往生要集』を淵源としていることを明らかにした（発表学会）。

選択証誠の成立過程 「選択証誠」は『阿弥陀経』から導出される。具体的には、成立過程の初期においては『阿弥陀経』の「念仏往生の旨」(弥陀本願)に対して「釈迦証誠」と「諸仏証誠」を説く。これを善導『法事讃』『随縁雑善』等の文で解釈してとを合釈し「釈迦仏選説念仏往生旨」と表現するようになる。最終的には『選択集』第十三章「念仏多善根篇」の議論に回収され、「証誠」の語は六方諸仏のみが担う過程を見た（雑誌論文）。

選択留教の成立過程 「八種選択義」の六種（選択本願・選択讃歎・選択撰取・選択化讃・選択証誠・選択我名）までが源信の『往生要集』大文第八念仏証拠門に淵源を認められることを論じたが、そうでなかった二種の「選択」(「選択付属」「選択留教」)のうち「選択留教」に見る『往生要集』の影響を考察し、「選択留教」もまたその成立背景において他六種の「選択」と同様、『往生要集』(大文第三極楽証拠門)に淵源を見ることを明らかにした（雑誌論文）。この結果をふまえて「選択留教」の成立過程を考察した結果、従来言われているように『無量寿経』『特留此終止住百歳』の文は末法滅の時代において他の諸経に対してその不滅性を称揚するのであるが、「選択留教」は念仏と諸行とを対比する中で『無量寿経』三輩段に説く「一向専念無量寿仏」(本願念仏である念仏)を強調する流れで説かれ始める。それが次第に弥陀の本願に加え、「釈迦の自説」を説き、「末法万年後の不滅性」を強調するようになる。これは『往生要集』極楽証拠門の影響である。そして『観無量寿経』付属文と『無量寿経』七処文が関連付けられる中で、「八種選択義」の素地が提示されていく。最終的に『選択集』では各段階の内容を再構成して第六章へと昇華していく。「選択留教」の成立過程は『往生要集』極楽証拠門を淵源とし、善導の著作による解釈が深化し続けた境地である（雑誌論文）。

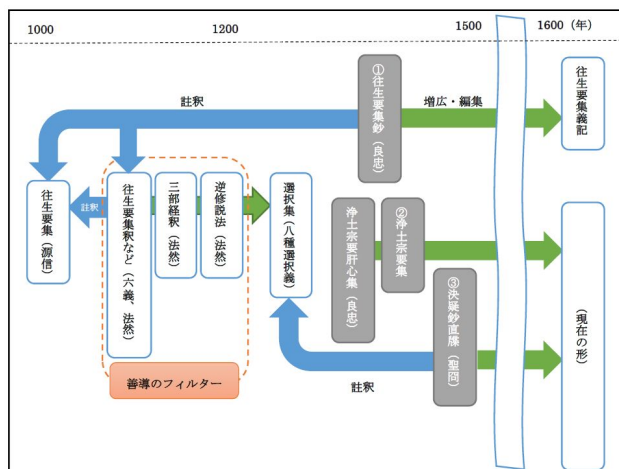
他の「選択」についても考察を継続中であるが、その一環で知り得た大阪河内長野の金剛寺が蔵する『選択集』の影印を紹介した（雑誌論文）。

(5) 総括

以上の成果における全体像は右図の通り。全体を通じ、やや個別研究に偏ってしまい、典籍の増広・改編を積極的に位置づけることが十分にできなかった。その理由として扱った文献がいずれも大部であり、かつ諸本の種類が多かったことや、最終年度には報告者の就職により職場環境が大きく変化し、予定通りエフォートを割くことが出来なかった点があげられる。引き続き研究を継続することで完遂していきたい。

また新たな課題も見つかった。今回扱った文献は三種であったが、個々の増広・改編の事例をつなぐ確実な共通性

は見受けられなかった。それを解消するためには近世初期における浄土教典籍がどの本屋からどの典籍がどの順番で刊行されたのかを俯瞰し、刊行状況を明らかにする必要がある。また、いまだ江戸文化の黎明期ともいえる慶長年間（1596-1615）において千葉県生実大巖寺第四世源誉随流（1558-1636）が宗書十部約百十巻の大部冊を印行していることも注目される。このように随流一門が行った刊行作業を追っていくことで、近世初期浄土宗の問題意識にさらに迫れるものであると考えられる。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10 件)

南宏信、良忠『往生要集鈔』が見た一切経の系譜と展開、仏教文化研究、査読無、63号、2019、155-164

南宏信、法然「選択留教」成立考、印度学仏教学研究、査読有、67巻2号、2019、76-80

南宏信、法然「選択留教」に見る『往生要集』の影響、浄土宗学研究、査読無、44号、2018、101-123

南宏信、法然における善導『法事讃』『直為弥陀弘誓重』等の文をめぐる解釈、印度学仏教学研究、査読有、66巻1号、2017、166-171

南宏信、法然「選択証誠」と「念仏多善根」、東山研究紀要、査読無、61号、2017、1-10

南宏信、法然「選択証誠」成立考 - 『法事讃』『如来選要法』をめくって、印度学仏教学研究、査読有、65巻1号、2016、40-44

南宏信、影印・翻刻 東向観音寺蔵 如導写 良忠撰『浄土宗要集』巻第二、浄土宗学研究、査読無、42号、2016、77-346

南宏信、慶安三年版『決疑鈔直牒』に見る跋文の問題、東山研究紀要、査読無、60号、2016、1-9
南宏信、金剛寺蔵『選択本願念仏集』上下解題、法然上人研究、査読無、8号、2016、1-2
南宏信、身延文庫蔵『決疑鈔糅議』断簡の一考察、印度学仏教学研究、査読有、64巻1号、2015、56-61

〔学会発表〕(計13件)

南宏信、法然「八種選択義」に見る『往生要集』の影響 法然「選択我名」成立考、平成30年度秋学期大学院中間発表会(浄土学部会・教員発表)、2018年11月17日、佛教大学
南宏信、法然「選択留教」成立考、日本印度学仏教学会 第69回学術大会、2018年9月1日、東洋大学
南宏信、法然「八種選択義」に見る『往生要集』の影響、浄土宗教学院東西交流研究会、2018年2月20日、大正大学
南宏信、法然「選択留教」に見る『往生要集』の影響、知恩院浄土宗学研究所月例研究会、2017年11月25日、知恩院浄土宗学研究所
南宏信、法然における善導『法事讃』「直為弥陀弘誓重」等の文をめぐる解釈、日本印度学仏教学会 第68回学術大会、2017年9月3日、花園大学
南宏信、良忠『往生要集鈔』が見た一切経の系譜について、浄土宗学研究所 月例研究会、2016年12月25日、知恩院浄土宗学研究所
南宏信、日本中世浄土教対一切経的接受 以良忠《往生要集鈔》為例、第四屆佛教文獻與文學國際學術研討會、2016年11月4-7日、浙江大學紫金港校區と徑山萬壽禪寺(中国)
南宏信、法然「選択証誠」成立考、法然仏教学研究センター第4回研究会、2016年10月14日、佛教大学
南宏信、法然「選択証誠」と「念仏多善根」、平成28年度 浄土宗総合学術大会、2016年9月16日、佛教大学
南宏信、法然「選択証誠」成立考 『法事讃』「如来要選法」をめくって、日本印度学仏教学会第67回学術大会、2016年9月4日、東京大学
南宏信、法然「選択証誠」成立考、平成二十七年度浄土宗総合学術大会、2015年9月16日、大正大学
南宏信、身延文庫蔵『決疑鈔糅議』断簡の一考察、日本印度学仏教学会第66回学術大会、2015年9月20日、高野山大学
南宏信、聖岡『決疑鈔直牒』の研究 版本系統と身延文庫本、平成二十七年度知恩院浄土宗学研究所集中研究会、2015年9月11日、京都知恩院和順会館

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)